

書評

野辺陽子 著
『養子縁組の社会学——〈日本人〉にとって〈血縁〉とはなにか』
(新曜社, 2018年)

大日 義晴*

本書は「親子とは何か」「血縁とは何か」という古くて新しい問いについて、制度の分析および当事者へのインタビュー分析を通じて考察を行った刺激的な労作である。

本書の問いと対象は以下のとおりである。「子どものため」の〈血縁〉の主題化はどのような社会的文脈のもとで起こっているのか、そして当事者にどのような効果を及ぼしているのかという問いを設定し、この問いを解くために、リサーチクエスションとして、(α)制度はどのように非血縁親子を構築するのか、(β)非血縁親子の当事者はどのように親子関係や自己を構築するのか、の二つが示されている。そして対象として、非血縁親子のなかでも、養子縁組を取り上げ、さらに養子縁組のなかでも、〈子どものための養子縁組〉に絞って、当事者のリアリティや当事者をとりまく社会的文脈を明らかにすることが目指されている。

本書は理論的な検討を行う《理論編》と経験的なデータを分析する《実証編》に分けられる。《理論編》では、親子と血縁と養子縁組に関する先行研究の論点が整理され、その弱点と盲点が指摘される。《実証編》は制度の分析と当事者の分析から構成される。

以下、本書の概要を紹介しよう。第一章「問いの設定——〈血縁〉の社会的分析へ向けて」では、まず先行研究における議論において、「非血縁子の増加＝血縁にこだわらなくなっている」「非血縁子の減少＝血縁にこだわるようになっていく」という家族形態と家族意識の対応関係を前提

とした枠組みが用いられていたと指摘し、この枠組みには限界があることを主張する。その上で、文化人類学の知見を援用しつつ、血縁を「当該社会において社会的・文化的に形成された生殖や世代継承についての知識や社会通念」と定義し、これを〈血縁〉と表記することが示される。そして、〈血縁〉を説明項から被説明項へ転換する必要があることが示され、〈血縁〉を説明するための分析枠組みとして、(A)〈血縁〉はどの制度のなかで扱われるのか、(B)〈血縁〉はほかのどの知・言説と結びつくのか、(C)〈血縁〉は関係性や自己の構築にどのようにかわるのか、という三つの視点が示されている。

第二章「養子縁組研究の批判的検討と本書の分析視点」では、《実証編》の準備作業として、先行研究における養子縁組と血縁に関する議論および養子縁組と「子どものため」に関する議論を批判的に検討し、分析視点の整理を行っている。指摘される問題点は多岐にわたるが、筆者は先行研究の問題点を、説明項としての血縁の限界、行為と意識を等値する解釈図式の二点に整理できると述べる。その上で、これらの問題点を乗り越えるために本書で採用される分析視点として、不妊当事者の選好だけでなく制約についても分析し、併せて代替選択肢を分析の射程に含めること、子ども自身の視点を重視すること、定位家族での経験と生殖家族での経験の関連に着目することが提示されている。

第三章「対象と方法」では、具体的な分析の対象とデータについて紹介されている。

* 西武文理大学サービス経営学部 専任講師

第四章と第五章は、リサーチクエスション（ α ）に対応した、制度についての分析である。第四章「特別養子縁組の立法過程における専門家言説とレトリック」では、特別養子縁組の立法過程において、血縁と親子関係との関連がどのように考えられたのか、その際にどのような知や言説が動員されたのか検証されている。具体的には、特別養子縁組の特徴的な内容についての議論における賛成論、反対論を参照しつつ検討されている。そして、特別養子縁組の立法に伴って、心理学的な専門家言説がレトリックとして使用されることによって血縁と親子関係が切り離されたこと、そして、血縁と子どもの「アイデンティティ」を接続する新たな認識枠組みが登場し、〈血縁〉の価値が維持されたことが示される。

第五章「特別養子縁組と隣接領域の影響関係と差異化」では、特別養子縁組の隣接領域である里親制度や不妊治療と特別養子縁組を比較することで、その差異や影響関係について分析を行い、特別養子縁組の特徴を理念と運用面から明らかにしている。そして、互いに差異化し、優位性を主張しながら、各制度が発展してきたことを踏まえ、各選択肢の親子観を比較し、非血縁親子を「子どものため」/親子関係/〈血縁〉の関連のバリエーションからみることで、「実親子」への同化と「実親子」から異化という大きな二つのカテゴリーに整理することができること、くわえて公的な養育と私的な養育という軸で整理することができることと述べている。

第六章～九章は、リサーチクエスション（ β ）に対応する、当事者についての分析である。第六章「親世代の行為と意識①——養子縁組が選択/排除されるプロセス」では、不妊当事者が養子縁組に至る/至らないプロセスを通じて、親子関係形成の時点においていかにして血縁が意識され、求められ、語られるのかについて、そして〈血縁〉が自己や親子関係とどのように関連しているのかについて、インタビューデータ四一事例を対象に分析が行われている。結果として、制約により選択肢が変化するため、最終的に選択した選択肢と選好は常に一致するわけではないこと、選好と現

実の不一致から生じる葛藤を低減するため、動機の語彙が用いられること、血縁の意味には多様性と多層性があり、それらは自己と関係性の構築にかかわっていることなどが示されている。そして〈血縁〉と「子どものため」という言説の関連については、リスクと責任の感覚と強い規範意識が付加され、「子どものため」に養子縁組を選択しないという言説が可能になることが強調されている。

第七章「親世代の行為と意識②——親子関係の構築」においては、養子縁組後の親子関係でどのように〈血縁〉が浮上するのか、また〈血縁〉が親子関係や自己とどのように関連しているのかについて分析するために、養親となった一八事例のインタビューデータを対象に分析が行われている。結果として、子どもへ適切にかかわろうとすればするほど、〈血縁〉が適切な関わりをする上で必要な情報として浮上するが、そこには心理学・医学・法学と〈血縁〉が接続した専門家言説があること、子どもに適切にかかわる上で複数の規範的言説との間でジレンマを抱えること、親が周囲への告知に対してとる戦略は、実親子を基準としており、社会からの曖昧な承認と包摂を感じていることなどが示されている。

第八章「子世代の行為と意識①——親子関係と『アイデンティティ』の構築」では、親子関係維持過程においていかにして〈血縁〉が浮上するのか、また〈血縁〉が親子関係や自己とどのように関連しているのかを明らかにするために、実際に養子として育った一〇名のインタビュー調査を通じて分析が行われている。結果として、親との関係においては、血縁の不在が関係の良し悪しの原因として解釈されることもあるが、いずれそれを相対化してマネジメントしていくこと、「アイデンティティ」には、生みの親の属性と誕生・親子分離の理由がかかわっていること、生みの親を「家族」や「親」とは差異化して定義すること、社会からの視線に対しては「普通である」という語りで抵抗していることなどが示されている。

第九章「子世代の行為と意識②——〈血縁〉の世代間再生産」では、子ども自身が子どもという役割から親の役割に移行するときに、親子観がど

のように変化するのか/しないのか、すなわち養子として経験した親子の経験が、親への役割移行にどのような影響を及ぼすのかについて、実際に養子として育った一〇名のインタビュー調査を通じて分析が行われている。結果として、未婚の事例では定位家族での経験と生殖家族の展望がほぼ対応するが、実際に子どもを育てている事例では養親子関係をポジティブに経験していても自分は養子を育てる意向はないこと、養子縁組という選択について考える際には、自分の選好以外の条件、例えばパートナーの意向などを考慮すべきこととして語る事例があること、不妊という状況でなければ実子をもつのが「自然」であり、養子を育てるという選択肢はそもそも意識しないこと、などが示されている。

第十章では四章から九章までの分析結果を統合して考察を行い、第十一章では本書の意義と家族社会学に対しての示唆が行われる。

本書の特徴と意義は以下のとおりである。第一に、家族社会学における血縁のとらえ方について、上述のとおり「非血縁親子の増加＝血縁にこだわらなくなっている」「非血縁親子の減少＝血縁にこだわるようになってきている」という家族形態と家族意識の対応関係を前提とした枠組みの採用を批判的に検討している点である。家と血縁の関連を問う視点は、有賀・喜多野論争以来とも言える日本の家族のとらえ方の基礎にかかわる重要なポイントだと思われるが、本書では、家を対象とした研究についても、また近代家族の視角から養子縁組を分析する研究についても、その分析においてどの水準/指標/基準を採用しているのか不明瞭な場合が多く、日本人の血縁意識の強弱はいかようにも主張可能であると批判する。このように「養子縁組する/しない」という軸を、血縁意識の強弱を判断する指標として用いることについて問題提起を行ったことは、既存の家族社会学の研究に新たな視点をもたらし、さまざまな議論を呼び起こす意味でも重要な貢献とみなすことができるだろう。

第二に、リサーチクエスション（ β ）に対応する、当事者への豊富なインタビューをもとに構成

される六章～九章の分析方法である。本書では「事例－コードマトリックス」を作成した上で、コード（変数）中心の分析を用いることで、事例の特殊性を超えた一般的なパターンや規則性を見出すことが企図されている。すなわち、事例を変数に分割し変数間の共変関係を検討し、相対的に広範囲の一般化を目指す、いわゆる変数志向アプローチに分類されると言えるだろう（この傾向はとりわけ八章・九章において顕著であるように思われた）。このような目的が設定された各分析において、丹念な「比較」の視点が徹底されている点は、インタビュー調査にもとづいた近年の社会学的な事例研究においてきわめて傑出していると言えるだろう。結果として、各章の記述部分はパターンごとに書き分けられており、読み手にとって親切的な構成となっている。《実証編》のなかでも特筆すべきは第六章だろう。子どもが欲しい不妊当事者を潜在的養親候補者として措定し、不妊当事者が養子縁組に至る/至らないプロセスを検討するために、養子縁組に進んだケースに加えて、里親制度、不妊治療、子どものいない人生という各選択肢を対象に含めており、不妊治療についてはさらに夫婦間の不妊治療と第三者のかかわる不妊治療を区別している。このような比較手法により、先行研究において想定されていなかった変数の組み合わせに着目することを通じて、不妊当事者それぞれの多様な選択のプロセスの有り様を見事に描き出している。

若干の疑問が残った点として、著者が、血縁をめぐるわが国の動態をどのように解釈しようとしているのか、そして今後の変動をどのように見通しているのかという点が挙げられる。例えば、1章（p27）や5章（p155）において、非血縁親子の動向等についての統計が示されるが、それぞれの件数の増減について、本書の知見を踏まえてどのように解釈することができるのか、いささか腑に落ちない感覚を覚えた。著者は、現代の事例を分析・考察するための理論と方法、それにもとづく経験的研究が不足していると述べ、上述のとおり、従来の家族形態と家族意識の対応関係を前提とした枠組みを批判している。そして、既存の相

反する議論のいずれがより確からしいのかを判断するよりも、むしろそれらが同時進行し、重なり合っていることに着目することが重要だと、明晰な主張を行っている。そして、日本社会全体の血縁意識の強弱について解釈することよりも、個別の親子形態について、丁寧に検証していく必要があるだろうと主張する。そして、現代の〈血縁〉の動態を把握するためには、「血縁の重視か/血縁の軽視か」という問いの立て方や、「血縁の重視から血縁の軽視へ」あるいは「血縁の軽視から血縁の重視へ」というような単線的な・一元的な変化を前提とした枠組みでは不十分であることが強調される。「二分法の隘路から逃れ、親子と血縁をめぐる多元的な状況や新しい意味の誕生を把握(p311)」することを重視すること自体は意義深い試みであり、当然異論はない。ただし、批判されるべきは変数と変数を安易に結びつけることであり、別の方法をもって「血縁の重視か/血縁の軽視か」という観点から今日の動態についての再検討が目指されても良いのではないだろうか。具体的には、血縁にふくまれる多層性を分節化・精緻化し、より適切な変数として抽出すること、併せて、先行研究において想定されていなかった変数の組み合わせ（例えば「血縁にこだわる→養子縁組したい」ような事例）に着目し、その関連を慎重に精査することによって、今日の一見相反する非血縁親子の動態を分析・説明することが可能に

なるのではないだろうか。しかし、本書の目的は、血縁を被説明項として対象化することなので、この指摘は不適切かもしれない。

関連して、著者は「事例の特殊性を超えた一般的なパターンや規則性を見出すこと」が本書の目的であるとし、変数を中心とした分析方法を採用しているわけだが、リサーチクエスション(β)については、それぞれの事例の個性や特殊性を明らかにすることを通じて、親子と血縁をめぐる多元性を理解する方法、つまり事例志向アプローチを採用する方法も考えられたのではないだろうか。この指摘はあくまでもないものねだりに過ぎないが、例えば不妊当事者が養子縁組に至る/至らないプロセスについての当事者たちの語りは、いずれも大変興味深く魅力的なものであるがゆえに、個々の事例を全体としてとらえ、文脈に着目しつつ読み解くことで、また別の発見が得られたのかもしれないと思えた。

2020年4月1日から、特別養子縁組の対象年齢を原則6歳未満から原則15歳未満に引き上げる改正民法が施行されるなど、本書の刊行後に養子縁組をはじめ非血縁親子をめぐる社会状況はさらに大きな変化を迎えつつある。そのような状況のなかで、本書が学術的にも実践的にも貢献しうる範囲はきわめて広い。ぜひ一読をお勧めしたい。

(だいにち・よしはる)